

KYOTO

UNIVERSITY

GUIDE BOOK 2022



京都大学大学案内 2022

知と自由への誘い

イメージしてください。
開かれた扉のむこう側。
京大生として過ごす日々。
「憧れの風景」が
「日常の風景」に変わる。
それはゴールではなく、
スタートです



■ 京都大学の基本理念(抜粋)

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する(平成13年12月4日制定)。

アドミッション・ポリシー

京都大学は、日本の文化、学術が育まれてきた京都の地に創設された国立の総合大学として、社会の各方面で活躍する人材を数多く養成してきました。創立から1世紀以上を経た21世紀の今日も、建学以来の「自由の学風」と学術の伝統を大切にしながら、教育、研究活動をおこなっています。

京都大学は、教育に関する基本理念として「対話を根幹とした自学自習」を掲げています。京都大学の目指す教育は、学生が教員から高度の知識や技術を習得しつつ、同時に周囲の多くの人々とともに研鑽を積みながら、主体的に学問を深めることができるように教養をすることです。なぜなら、自らの努力で得た知見こそが、次の学術展開につながる大きな力となるからです。このため、京都大学は、学生諸君に、大学に集う教職員、学生、留学生など多くの人々との交流を通じて、自ら学び、自ら幅広く課題を探索し、解決への道を切り拓く能力を養うことを期待するとともに、その努力を強く支援します。このような方針のもと、優れた学知を継承し創造的な精神を養い育てる教育を実践するため、自ら積極的に取り組む主体性をもった人を求めています。

京都大学は、その高度で独創的な研究により世界によく知られています。そうした研究は共通して、多様な世界観・自然観・人間観に基づき、自由な発想から生まれたものであると同時に、学問の基礎を大切に研究、ないし基礎そのものを極める研究であります。優れた研究は必ず確固たる基礎的学識の上に成り立っています。京都大学が入学を希望する者に求めるものは、以下に掲げる基礎的な学識です。

- (1) 高等学校の教育課程の教科・科目の修得により培われる分析力と俯瞰力
- (2) 高等学校の教育課程の教科・科目で修得した内容を活用する力
- (3) 外国語運用能力を含むコミュニケーションに関する力

このような基礎的な学識があってはじめて、入学者は、京都大学が理念として掲げる「自学自習」の教育を通じ、自らの自由な発想を生かしたより高度な学びへ進むことが可能となります。

京都大学は、本学の学風と理念を理解して、意欲と主体性をもって勉学に励むことのできる人を国内外から広く受け入れます。

受入れにおいては、各学部の理念と教育目的に応じて、その必要とするところにしたがい、入学者を選抜します。一般選抜では、教科・科目等を定めて、大学入学共通テストと個別学力検査の結果を用いて基礎学力を評価します。特色入試では、書類審査と各学部が定める方法により、高等学校での学修における行動や成果、個々の学部・学科の教育を受けるにふさわしい能力と志を評価します。



冒険につづく滑走路



果てなき学問のフィールド。

古今東西、広大無辺につながる学問の扉が、京都大学で待っています。

ここで生まれるふとした出会いや掘りさげた疑問が新たな冒険へと連れだしてくれるはず。
湊長博総長を筆頭に、6人の研究者と7人の学生・卒業生たちに挑戦の醍醐味と心がまえをうかがいました。



湊 長博 京都大学総長

みずからの内な

将来のことなど
考えず、
読書に明け暮れ
出会った一冊が
進む道を決めた

高校生の私にとって、大学という場所は中になが入っているのかわからない、玉手箱のように見えました。インターネットが普及した現代とは違い、当時の地方の高校生がふれられる大学の情報は限られたもの。京都大学医学部を選んだのも、化石好きが高じて生命の起源を学べる場所を探した結果、高校の教師から「生命なら医学部だ」と。

高校時代は数学少年でもありました。一癖ある数学の問題があると、授業そっちのけで数式と向きあった。好きなことを楽しみながら追究し、どんだんのめり込む。私の選択は、そうした反応の連続です。大学卒業後のキャリアなど、考えてもみなかった。とにかく胸にあったのは、「新しいことが待っているに違いない」という大きな期待でした。

新たな環境にさらされ、未知の自分と出会う

とはいえ、入学した年は大学紛争の真っ只中。今のコロナ禍よりもひどい状態で、授業は開講されず、空いた時間を埋めるように読書をしました。大きな出会いは、F・M・バーネットの『Cellular Immunology』。現代免疫学の理論を確立し、ノーベル生理学・医学賞を受賞した名著です。夢中になりましたが、わからない用語があると、とたんに理解できなくなる。一人で読んでいては埒があかないと、免疫学の研究室を訪ねました。

研究室のメンバーは3回生の私をこころよく迎え入れてくれました。「実験がしたい」という直談判にも二つ返事で了承し、好きにさせてくれた。実験というものは、失敗・成功にかかわらず、かならずなにかが起こる。その現象を見て、考える。このプロセスに、「これまでのにめり込んだなかで、実験がいちばんおもしろい」と魅了されました。

のちの研究テーマである「がん免疫」に出会ったのも『Cellular Immunology』でした。最終章、期待に胸を膨らませてページをめくると、たったの数ページで終わってしまった。「〈がん免疫〉というものを信じているが、残念ながらわかっていることはほとんどない」と。未知への探究心がふつふつと湧いてきました。

私にこそできるサイエンスを見いだす

転機は5回生。入り浸っていた研究室の教員の協力で、学部生ながら英語論文を執筆しました。著名な学術誌に掲載されると、「うちで研究しないか」とアルバートアインシュタイン医科大学から連絡があった。師匠と仰ぐことになるバリー・R・ブルーム博士からでした。卒業まで待ってもらいはしましたが、即断して渡米。がんと免疫に関する研究をはじめたのです。

ですから、私は大学院に進んでいません。さらに就労条件すら聞かずに海を渡りましたから、リスクな選択だともいえます。でも、私にとっては自然のなりゆき。好きなことに一所懸命に取り組んでいたら、道ができた。リスクをとらず、着実に前進するのも一つですが、そうす

湊総長
大学時代

る 声 こ そ 羅 針 盤

ると成功してもあまり驚きはない。それなら、自分の内なる声に従い選択したい。アメリカで3年を過ごしたあとも同じです。ブルーム博士の勧めでお会いした石坂公成先生の一言で、日本に戻り、内科医としてはじめて患者を診ることに決めた。当時の私には、もっとも先の読めない選択でした。

学生時代の臨床研修先は呼吸器内科。肺がんは当時、きわめて死亡率の高い疾患。一人も助けられない、厳しい現実打ちめされました。それ以来、〈謎解き〉のサイエンスに没頭してきましたが、医師としてふたたび、がんの患者と向きあうなかで、これまで挑戦してきた私のサイエンスの意義が明確になった。〈患者がいる・腫瘍がある〉という事実はどう対応するのか。この視点こそが私のサイエンスの根拠だと。

12年の臨床経験のなかで、「治したい」という医師の思いに応えるには、サイエンスが追いついていないことも痛感しました。患者を知る私にこそできるサイエンスがあるはずだと、基礎研究の道に戻ることを決めたのです。当時、臨床から基礎研究に戻る例はめったになかった。だけど、私にとっては、これも自然のなりゆきでした。

想像できない道を選び続けた

それから京都大学で20年、研究を続けました。最終的には、のちにノーベル賞を受賞した本庶佑先生と組んだ研究が実を結び、がんの新たな療法を確立しました。私たちのマウスでの実験は、米国でヒトに応用され、メラノーマ患者の4~5割、肺がん患者の2割を治癒することに成功しました。肺がんが治るなんて、学生時代にはありえなかったこと。報せを聞いたときは、ほんとうにうれしかったです。

頭から離れない一言があります。米国のがんに関するシンポジウムで、ある研究者に観客が問うたのです。「すばらしい研究です。ところで、一人でも治療に成功したのですか?」。がんの研究はたんなる〈研究〉ではだめだ。そう突きつけられたのです。でも、いまなら胸を張り、「はい、成功しました」と答えられる。あのときの観客の方たちにも届く仕事できたことは、私の誇りです。

ターニングポイントに立つたびに、先の読めない道ばかり選んできました。たしかに、まっすぐにのびる見晴らしのよい道を歩くのは気持ちいい。だけど、私は曲がり角が現れたときにこそ、ワクワクする。どうせ先は見えないのだから、みずからの声に従い、行きたい道をゆく。型通りに進む人生はおもしろくないですからね。

勉強するからには
楽しまない損。
一所懸命に、
「いま」を楽しめ!

みなと・ながひろ

1951年、富山県に生まれる。専門は医学、免疫学。京都大学医学部卒業。医学博士。京都大学大学院医学研究科長・医学部長、京都大学理事・副学長、プロボストなどを歴任。本庶佑特別教授との共同研究は、新しいがん免疫療法として結実し、本庶特別教授の2018年ノーベル賞受賞にも繋がった。



特別座談会

もう一人の「自分」

に出会える道をゆけ

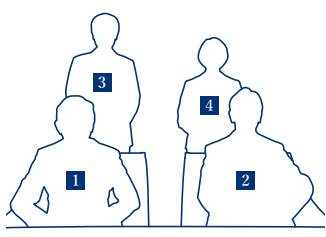


大学での学びは、みずからの可能性をどのように広げるでしょうか。受験生のみなさんの心の中では、部活動に精を出す、海外に留学する、とことん学ぶなど、幾多の夢や計画が膨らんでいることでしょう。でも、刺激的でほんとうにおもしろいのは、想定外の無限に広がる道。「京都大学総長賞*」を在学中に受賞した卒業生の学部学生時代をふり返りながら、みずからの歩みを豊かにするにはどうすべきか、その心の置きようを語りあいました

*京都大学総長賞 本学の学生表彰制度。学業、課外活動、各種社会活動の3分野で、特筆すべき業績をあげた学生・団体を対象に顕彰する。

出席者

- 1 湊 長博
京都大学総長
- 2 村上 章
京都大学理事・副学長
- 3 森部 文弥さん
東京医科歯科大学 非常勤講師
- 4 本間 樹良来さん
京都大学大学院農学研究科
修士課程1年生



湊 京都大学には日本各地から学生が集まりますが、森部さんは東京都、本間さんは北海道の出身ですね。なぜ、地元から遠く離れた京都大学を選んだのですか。

森部 京都という地への憧れがありました。東京のせわしない日常とくらべて、旅行で訪れた京都の学生たちは、のびのびと自由に暮らしていて、緩やかな時間の流れを感じました。また、研究に興味があったので、「研究といえば京都大学」という研究力の高さにも惹かれました。

村上 京大での研究に興味を抱いたのはどうしてですか。

森部 きっかけはiPS細胞でした。進路を決めた高校2年生のころは、日本中が山中伸弥先生のノーベル生理学・医学賞の受賞の話題でもちきりでした。祖母の認知症が進行していた時期でもあり、未だに治せない難病もiPS細胞によって仕組みが解明できたり、新しい治療を生みだせたりする、そういった革新的な潮流に希望を覚えたのです。

湊 高校生のころには、自分の将来を自分で考え、進む道を決める過程がはじまっていたのですね。私たちの時代は、情報が少ないこともあってか、大学選択はいいかげんだった(笑)。時代が変わったことを感じますね。本間さんはいかがですか。

本間 私は、中学生のころから、途上国の貧困問題に関心がありました。

湊 中学生からですか。

本間 中東地域の内戦や難民問題を報道する映像がきっかけでした。貧困に食糧問題からアプローチしたかったのですが、どの学部に進めばよいのかわからず漠然と大学を探していたときに、京大の農学部食料・環境経済学科のホームページにたどり着きました。研究分野の紹介で、モヤモヤと感じていたことが言語化されているのに感動し、高校3年生で急遽、京大志望に切り替えました。関西地方にはほとんど馴染みはありませんでしたが、「憧れ」を糧にして突き進みました。

湊 いまの若い人たちは、私の想像以上にみずからの進路選択を考えているのですね。学問する目的があり、それにはどんな大学がどんな学びをしているのか、事前にしっかりと調べている。村上先生の時代はどうでしたか。

村上 私は出願直前に、学問とは関係のないささいな理由で他大学の工学部から京大農学部志望に方向転換しました。過去問は一つも解かず、学科選択も行き当たりばったり(笑)。結果的には、よい選択でしたけれどね。

湊 そうそう、そういう時代でしたね。

放りだされたときに湧き出る意欲に従う

湊 大学で学んでいると、思ってもみなかった分野に興味を湧いて、想定とは違う方向に歩んでいることはよくあります。本間さんの問題意識は明確でしたが、いまはどうですか。

本間 高校生時代は、途上国の問題という食糧と貧困くらいしかイメージできませんでした。でも、それはたくさんの課題の一角。一方的に介入しても、うまく解決するものではないことも痛感しました。農村経済や農学の枠を超えて、多くの分野に関心を広げるようにしています。

村上 森部さんは、どうしてがんの研究をはじめたのですか。

森部 患者さんの遺伝情報を調べて、より効果のある治療法

を選択するプレジジョン・メディシンに興味がありました。がん治療で近年とくに注目される医療です。これを学びたくて、4回生の夏にアメリカ国立衛生研究所(NIH)の国立がん研究所に短期留学して最新の研究に触れてきました。

湊 4回生というと、マイコースプログラム(学生自主研究)ですか。

森部 はい、そうです。

湊 マイコースプログラムは医学部の制度で、私が現役だった時代から続いています。夏休みを含めて3か月以上、講義や試験のない自由な時間が与えられるのです。ふだんの講義は消極的なのに、この期間はのめり込むように研究に励む学生がいましたよ(笑)。いまも3割が海外に留学すると聞いています。

いつの時代も、自由な時間をきっかけに、「なにかがしたい」という秘めたポテンシャルが湧きあがってくる。私もそうした時間に育てられました。学生が、自由な時間を主体的に確保できる仕組みは、この先も確保したいですね。

道中で出会う「見知らぬ自分の姿」は成長の証

湊 お二人は、この春に学部を卒業されましたが、卒業は「あがり」ではないですね。本格的にみずからの人生を選択し、歩みは始めるときです。森部さんは研究者の道に進むのですね。

森部 9月からスイスのバーゼルにあるフリードリッヒ・ミーシャー研究所(FMI)の博士課程に進みます。

湊 外国での暮らしは人生を変えますよ。新しい世界、新しい人たちに出会い、人生や考え方が大きく展開する。チャンスとめぐりあう可能性がきっと広がります。

本間 私は学部生で留学したかったのですが、スキー部の活動が充実していて忙しかった。修士課程のあとに留学したいのですが、そのまま博士課程に進むか、いったん社会で経験を積んでから大学に戻るか、悩んでいます。先生方はどのように進路を決められたのですか。

湊 私は真っ当なルートではないかもしれないから(笑)。村上先生はどうですか。

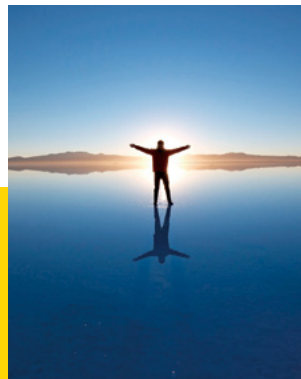


森部 文弥さん 東京医科歯科大学 非常勤講師

FUMIYA MORIBE

2021年3月 医学部医学科卒業、東京都海城高等学校出身
2020年度 京都大学総長賞受賞

受賞理由 >> 4回生のときにアメリカ国立衛生研究所(NIH)に留学し、抗がん剤治療の効果予測する新規マーカーに関する基礎研究に携わる。帰国後はその研究を発展させて、リンパ腫に注目したプロジェクトを自ら着想・立ち上げる。NIHや他大学と共同して、リンパ腫の新しい治療標的マーカーを世界で初めて報告し、高い評価を受ける。



左/ボリビアのウユニ塩湖。2回生のときに南米を旅していた際に訪問
上/NIHへの留学中にラポのメンバーと撮影。世界各国から学生、研究者が集う

村上 私も真っ当かというと……(笑)。工学研究科修士課程修了後、いったん就職しました。大学に戻ろうとは思わなかったのですが、学部時代の研究室の教授から、「助手の席が空いたから戻ってこないか」と。論文は書いていないし、根拠も自信もなかったのですが、当時はこのようになんとなく大学教員になる人がいましたね。スポーツで日本一をめざして大学に進んだはずの友人が、いつのまにか教授になっていたりする(笑)。

本間さんはスキーを続けるのですか。

本間 正直とても悩んでいたのですが、今日の話がうかがってできる限り続けたいと思いました。12月に大きな国際大会があるので、まずはそこをめざして頑張ります。

湊 人生には、思ってもみない分岐点が現れることがあります。そんなときに、想定外の方向にも動けるかどうか。私は先のことを考えず、悪くいえば衝動的に、善くいえば心が動くままに方向を選択してきてしまいましたね。

人生設計をきっちり描くのもひとつですが、予定調和の方向、想定内の人生に収めるだけではちょっと寂しいかもしれない。外の影響を受けてこそ、気づかない自分の特性や長所が引き出される。「こうしたい」という思いに近づくチャンスがあれば躊躇せず、とにかく掴んでみることでしょね。

村上 「将来に役にたつから、これを勉強する」では、可能性を狭めてしまう。新しいアイデアも生まれにくいですね。

湊 学生時代の私は、読書ばかりしている内向的な学生でした。いまではだれも信じてくれませんが(笑)。ところが、海外に飛び込んで、とにかく現地の人たちの学びのスタイルに食らいついていると、いつのまにかだれとでもワイワイとやっている自分がいて、「自分はこんな人間だったのか」と驚いた。こんな新しいみずからの一面に出会えるのも楽しい。

やぶれかぶれでも、ぶつかってみる

村上 本間さんの卒論のテーマは、「ザンビアの投票システム」

とうかがいましたが、ザンビアには行かれましたか。

本間 新型コロナウイルスの影響で、渡航はできませんでした。卒論は、長年ザンビアを研究する先生にデータを紹介してもらい、分析してまとめました。将来は中東地域をフィールドにしたいと考えています。現地の様子を知るためにパレスチナを訪れたり、中東地域を研究する他学部のゼミに通うなど、準備はしています。

森部さんは、在学中に30か国を旅されているのですね。進路選択に影響はありましたか。

森部 2回生のとき、南米を旅していた際にボリビアのウユニ塩湖からチリのアタカマ砂漠までを2泊3日間、車で移動する現地ツアーに参加しました。日本からは私一人でしたが車にはカナダやオランダ出身の人たちが同乗していて、みんな英語がうまい。会話の速度についていけず、静かに窓の外を見つめるしかなかったです(笑)。それからというもの、英語への意欲がいっただんと湧き、海外への関心が増しました。

本間 私も同じような経験があります。パレスチナでユースホテルに泊まったとき、ほかの宿泊客たちと映画を見ましたが話についてゆけず、みんなが笑うところで笑えなかった。

村上 私が何度か訪問・滞在したミラノ工科大学では、英語を話す人がほとんどいないので、イタリア語を覚えるしかない。やぶれかぶれでやるしかなかった。案外、乗られるものです。

湊 現地の人になりきることも重要ですね。ニューヨークで暮らしていたときは、ニュー Yorker の気分で街を歩いていましたから、街角でふとウィンドウを見て、「あれ、あの小さな生きものはなんだ? あっ、おれだ」と(笑)。

それはともかく、現地の人たちの心持ちになると、こういう場だからこそ、こういう論理や考え方が生まれるんだと、すっと腑に落ちたりする。海外で暮らすと苦勞もするが、そのぶん精神は頑丈になります。これから更に苦勞を重ね、ステップアップしていくお二人の活躍を楽しみにしています。



本間 樹良来さん 京都大学大学院農学研究科 修士課程 1回生
KIRARA HOMMA

2021年3月 農学部卒業、北海道札幌旭丘高等学校出身
2020年度 京都大学総長賞受賞

受賞理由 >> 2020年のスキーオリエンテーリング北海道選手権大会学生パシュートクラスで優勝。世界学生スキーオリエンテーリング大会選手権大会に日本代表として選出される(大会は中止)。スキーオリエンテーリング・ワールドカップ・ファイナル2020では、日本人トップの成績を収めた。



左/3回生時のインカレ。個人戦で二冠を果たし、クラブの一部昇格に貢献
上/パレスチナ訪問時は各都市を地元の方に案内してもらった



ストライクゾーンを広く構えて チャンスはのがさない

村上 章 京都大学理事・副学長

導入から6年めを迎えた特色入試によって、学生のあいだでよい刺激が生まれています。特色入試で入学した学生のなかには、一般入試で入った同級生に負けたくないという学生や、「博士課程に進みたい」と早々に宣言する学部生も。一般入試だけでは出会えない学生に扉をたたいてもらえるように、学部それぞれが選抜方法に工夫を凝らしています。

学生の多様性という点では、男女共同参画社会の実現のために、大学でも女性の教員を増やすことが求められています。それには女子学生を増やす必要もありますが、一部の理系学部では女性の比率が9%台に留まります。「キャリアパスが描けない」といった不安もその一因かと思われます。不安をはねのけて「京大に入りたい」と思ってもらうために、女子高校生を対象としたイベントの開催や広報誌などを通じて女性の卒業生や教員、学生の生の声を発信することに力を入れています。

2020年度はコロナ禍の影響でオンライン授業を余儀なくされました。これは大学教育にとってネガティブな状態ですが、授業改善などこれまではないポジティブな面もあったと思います。対面での授業や指導が戻りつつあるいま、学生の学びへの意欲は以前にも増しており、学生が対面授業を強く望む状況はむしろ新鮮です。オンライン授業の導入

を機に教員側も教育方法にさらに工夫を重ねていますから、その相乗効果でよい方向に変わりつつあると思います。対面とオンラインのよいところを組み合わせた複合的な授業も増えています。

大学には高校生のみなさんが知らない世界がたくさんあります。私は地盤工学の専門ですが、入学前にそもそもそうした学問領域があるとはまったく予想しませんでした。「この道しかない」と思い込むよりも、視野を拡げて「ちょっとおもしろそう」、「なんとなく惹かれる」と感じたらどんどん首をつっこんでほしい。大学での学びの本質は、どこに入るかということもありますが、そこでどんな世界やどんな人に遭遇するか。チャンスはいつでもどこからくるのかわかりません。それをつかむには、興味ストライクゾーンを広く構えるほうがいい。私たち大学側の役割は、学問の世界の広さを伝えることかもしれません。

むらかみ・あきら

1956年、広島県に生まれる。専門は農業土木学、地盤工学。農学博士。京都大学農学部卒業、同大学大学院工学研究科修士課程修了。兵庫県に入庁後、京都大学農学部助手・助教授、岡山大学大学院環境学研究科教授、京都大学大学院農学研究科教授、同大学農学研究科長および農学部長を経て、2020年から現職。土構造物の挙動を予測する数値解析法、逆解析法の開発とその応用を研究。



大山 修一

アジア・アフリカ地域研究研究科教授

SHUICHI OYAMA

アフリカの砂漠にゴミを撒く。 現地の知恵が緑化につながった軌跡

調査地の一つのニジェールは、国土の大半が砂漠に覆われた西アフリカの国。私は大学院を修了した直後、その土地にあわせた農法や暮らしの営みを知りたくて、行き当たりばったりで農村に転がりこみ、村長の家に居候していました。そこで気づいたのですが、村人たちは、暑い昼間に木陰で昼寝やトランプなどをして過ごし、夕方になると決まって家でゴミを集めて畑に運び、作物の育ちが悪い土の上に(置く)のです。ゴミの8割は家畜の糞や脱穀した藁。すぐにシロアリが集まり、硬い地面に巣穴を掘り、ゴミを分解。硬い地面は肥沃な土壌に変わります。雨季の6~7月にはゴミに混んでいた植物の種子が発芽。1か月ほどで緑の草が覆われたのです。村人たちは、科学的なしみはわからなくても、畑仕事の経験からゴミで土壌が変わると知っていたのですね。



緑化活動は、熊手やつるはしでゴミを集めてトラクターで運び、砂漠の上に撒いて平らにならすという重労働。現地の仲間とともにゴミの運搬や緑化に取り組む一方で、その有効性や安全性の科学的な実証も続けている(ニジェール、2012年)

「ゴミを砂漠に運べば草が生えるのでは」。このひらめきが起点となって、ゴミをつかった緑化活動がはじまりました。ほかの地域にも目を向けると、人口の多い都市には大量のゴミが処理されずに放置されていました。都市のゴミもその8割は家畜の糞や庭木を剪定した枝葉といった有機物、そして風で飛んできた砂。試してみると結果は予想どおり。大きな循環の輪が回りはじめました。

研究の原点は小学生のころ。植物を育てるのが好きだった私は、鉛筆の削りカスなどを鉢植えに入れて観察したものです。当時はアフリカで大規模な干ばつが起り、多くの人や家畜が亡くなりました。その報道を見て「なんとかしたい」という思いが芽生えたのです。京大を選んだのもアフリカに行きたかったから。現地の暮らしにどっぷりと浸かり、言葉を覚え、人間関係を築いてやっと調査がはじまるフィールドワーク。多くの学生を積極的に送り出せるのは、アフリカ研究者の層が厚い京大ならではのです。

最貧国のニジェールでは、貧しさから社会に不満を抱いてテロリストに共感する若者も。私のとなりでゴミを運ぶ青年もその一人でした。けれど、みんなで汗を流してゴミを撒いた土地が緑になると、過激な思想は口にしなくなりました。いま思うのは「学びは社会を変えられる」。すぐに答えを求めずに体をもって理解できるまでとことんつき詰める。そこで得た気づきを役だてて、社会のひずみを改善する方法を考えるのが研究者の使命です。まずはいまの社会をよく見ること。それがはじめの一步です。

おおよま・しゅういち
奈良県出身。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(人間・環境学)。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授などを経て、2020年から現職。専門は、地理学、環境問題、人間の安全保障。著書に『西アフリカ・サハルの砂漠化に挑む—ごみ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』(昭和堂)など。



酒井 章子

生態学研究センター 教授

SHOKO SAKAI

植物を知ることのできる新たな探究の種。 自分色の花を咲かせる研究者

植物を知れば知るほどつる、「生きものは、なぜわざわざ苦労する方法で子孫を残すのか」という疑問が研究の原点。単独で子どもをつくるのがいちばん合理的に思えますが、生きものはあえてオスとメスががいなければ成り立たない有性生殖で繁殖します。この問いの答えを求めて、東南アジアの熱帯雨林や日本の森林で、植物の有性生殖のしくみを研究しています。

生態学に進んだのは、好きなことを自由に研究できそうだから。生態学の先生や先輩がたは、研究材料も切り口も個性的で〈キャラのたつ〉研究者に見えたのです。私の色を出せる研究をしたいという思いはだいにしています。でもそれ以上に私をつき動かすのは、自然を相手にするわくわく感。野生植物相手であるがゆえに想像を超える結果を得ることがあります。そこから思ってもみない

仮説が生まれ、さらに検証したくなる。

10代のころは「こうしなさい」と縛られるのが嫌で、学校が嫌いでした。ところが京大では、いろいろな先生との出会いがおもしろくて講義がなくてもキャンパスに入り浸るほど。先生と話したいがために講義の内容や教科書からわざわざ質問を見つけて、研究室にしよっちゅう押しかけたものです。「調査について行かせてください」と頼んだことも。先生たちは、こんな図々しい学生ほどおもしろがって相手をしてくれました。

現在の専門である環境学や生態学以外の先生で印象に残っているのは3年前にノーベル賞を受賞された本庶佑先生。授業とはべつに自由に参加できるゼミを定期的に開いてくださり、毎回30人もの学部生が輪読や議論をしました。本庶先生はただ黙って聞き、さいごに口を開きます。そのたった5分の言葉が心にずっと響きました。なかでも「生きものには、必要以上に複雑でむだに見える領域はたくさんある」という視点は、現在の研究テーマに通ずる部分も。こうした交流が私の探究心を育ててくれたのかもしれない。

いまはコロナ禍という危機ではありますが、一方で社会の深いところで変革が起っています。この変化には、柔軟性や発想力のある若い人の力が求められている。危機を乗り越えた先にはこれまでには考えられなかったチャンスがゴロゴロとあるはず。それをうまく拾って、未来をよい方向へ引っ張ってほしいです。



大学院では、ボルネオ島の熱帯雨林で高さ60メートルの木の上で調査・実験を行った。そのときの一枚。撮影は指導教員で写真好きの故・井上民二先生

さかいしょうこ

千葉県出身。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(理学)。京都大学生態学研究センター助教、同准教授、総合地球環境学研究所准教授などを経て、2019年から現職。専門は植物生態学。ボルネオ島の熱帯雨林などに足を運び、植物と昆虫の関係を調査。第6回京都大学優秀女性研究者奨励賞(研究者部門)受賞。



浅利 美鈴

地球環境学堂 准教授

MISUZU ASARI

環境漫画家でもある恩師(高月紘氏)等の作品が並ぶ研究室。仙台市の腕章は、東日本大震災時に災害廃棄物への対応のため現地入りした際のもの

〈京都大学〉と〈エコ〉を結びつけたパイオニア。 足元からはじめる「わがこと」の輪は拡大中

小学生のころに応募した「水の作文コンクール」が環境問題と私の最初の直接的な接点。最優秀賞を受賞したことで責任感が生まれ、やたらと熱心に節水に取り組み、家族や他者にも押し付ける子どもでした(笑)。

本学に入学した1996年は、気候変動に対して世界の約束事を定めた京都議定書の採択をはじめ、世界規模で地球環境問題への関心が高まった時期。工学部にも環境問題を扱う地球工学科ができ、私はその1期生。地球環境問題の解決に向け、正義感に燃えていました。他方、工学には、都市開発や資源・エネルギー多消費型製品など、環境破壊につながる側面がありますので、内側から変革を起こせないかという漠然とした思いもあったかもしれません。

学部時代、本学のキャンパスを眺めて驚いたのは、環境意識や行動レベルの低さ。ごみ分別も充分でないし、省エネや環境

配慮への意識は見てこない。環境問題を扱う学科ができたのに、自分たちの足元がこれでは示しが見つからない。「京大ゴミ部」を立ち上げ、キャンパスのエコ化を推進する活動をはじめました。

エネルギー消費量を調査したり、総長にエコキャンパス化への提言をしたり、学内を東奔西走。つねに市民の側に立って環境問題に取り組む恩師と出会い、志を同じくする同世代の仲間にも恵まれた一方で、研究を優先し省エネ等に無関心な先生方との遭遇による挫折感や無力感も味わいました。違いを痛感するなかで、「どうすれば意識を高めてもらえるのか」と、環境教育や啓発活動を重視する活動への道が見えてきたのです。

環境問題を「わがこと」と捉えてもらう工夫は、いまま試行錯誤の最中。どんな時代、どの国・地域でもかならず生まれるごみがその突破口です。世界各地でごみの実地調査をしつつ、「京大ゴミ部」の発展形「エコ〜ど京大」に参加。かばんの中のプラスチック製品を数えてSNSで共有する「#かばんの中のプラ」企画や「みんなの食ロス革命」など、学生や企業、地域の方を巻き込み、京都大学から「わがこと」の輪を広げています。

戦後は大量生産・消費・廃棄の時代。すべての人に、すべての物の消費を我慢してもらうことは難しいですが、ものに頼らない豊かさを評価する社会に確実に移行しています。ユニークさを肯定し、所属を超えて多様な人が交わる本学には、そのヒントが満載です。みなさんがこのユニークなコミュニティのつぼ、ジャングルのような世界に飛び込んでくれる日を心待ちにしています。



ごみ問題以外にも、SDGsや持続可能な社会づくりの観点から、京都市京北地域等で地域創生の活動にも取り組む。現地に赴き、地域の方の声を聞きながら課題や目標を共有し、世代や分野を超えて「持続可能性」を「わがこと」にして行動してもらえるよう研究・教育・社会貢献活動を行う

あさり・みすず 京都府出身。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(工学)。京都大学環境保全センター助手、助教などを経て、2016年から現職。研究テーマはごみや環境教育。「3R・低炭素社会検定」、「京都超SDGsコンソーシアム」などを立ち上げ、啓発活動や情報発信にも力を注ぐ。



マリオ・ロペズ

東南アジア地域研究研究所 准教授

Mario Lopez

言語は異なる価値観をまなざすレンズ。 移民のリアリティに迫るフィールドワーカー

フィールドワークに目覚めたのはロンドン大学在学中。スペイン語が話せることもありメキシコに留学したことがきっかけでした。メキシコは多くの少数民族が暮らす多様性豊かな国。授業にもマヤ系先住民族の学生が何人も出席していました。驚いたのは、彼らが教師とはスペイン語で会話し、仲間内ではマヤ語を使うこと。スペイン語がひろく話されている一方で、民族固有の言語がしっかりと受け継がれていることに感動しました。そうした地域に根差した文化の実態に迫りたいと文化人類学の道に進み、「人の移動」をテーマに世界各地を訪ね歩いています。

26歳で日本に移り住み、南米やフィリピンからの移民の調査を開始しました。そこで目にしたのは、特定の地域で働く多くの外国人たちの姿。それ以来彼らが日本でどのようなコミュニティを形成

しているのかを探るべく、各地に足を運んでいます。婚姻関係にあるフィリピン女性と日本人男性の調査は長年の研究テーマ。結婚や出産というイベントをとおして移民たちが経験する変化を、対話を重ねながら追っています。近年は介護職に就く移民向けの日本語テキストの作成にも協力。社会に貢献できる実践型研究にもやりがいを感じています。

異なる文化圏の人々から話を聞くには「言語」がなにより重要。日本人が日常的に使用するのは日本語だけですが、私が教える学生の中には5か国語を話すインド人の留学生もいます。特定の言語が公用語として浸透していても、生活の中では地域固有の言語を併用している例は多い。そんな複雑な言語環境を生きる人々のリアリティに迫るには、それに応じた言語の習得が欠かせません。言語はいわば異なる世界の見方に近づくためのレンズ。相手や状況にあわせて柔軟に用いることで、異文化理解に開かれた視野が得られるのです。

異なる文化との出会いは、常識の殻を破るチャンスです。京大には世界各地から学生が集まり、どんな地域や言語でも探せば一人は精通している人がいる。多様な価値観に触れられる豊かな環境がここにはあります。「多様性理解のレンズ」を磨けば、どんな相手とも対話のできる懐の深さが身につきます。ぜひ広大な世界へと冒険の一步を踏み出してください。



研究のかたわら、主に1、2回生を対象とした全学共通科目で文化人類学、グローバル化の講義を担当する。講義は全学部の学生に開放されており、分野を問わずさまざまな専門の学生が高度な研究の一端に触れることができる

Mario Lopez

イギリス出身。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ修了。東北大学への留学後、九州大学大学院を修了。立命館アジア太平洋大学の講師を経て、2009年から現職。研究テーマは国際移動・少子高齢化への対応など。在日外国人への介護研修を支援する企業と協力して介護職用の日本語テキストを作成するなど、社会貢献にも取り組む。



田中
花音
さん

総合人間学部 4 回生
東京都東京学芸大学附属高等学校 出身

授業中の落書きが生んだ出会い。 筆で切り拓いた私の道

総合人間学部を受験したのは、最後まで進路に迷っていたから。文理を問わず広く学べ、どんな選択肢にも挑戦できるという点が魅力的でした。大きな出会いは、ある実習授業でのこと。標本作成のかたわら、接着作業に使うグルーガンで絵を描いて遊んでいると、それを目にした先生が関心を寄せてくれたのです。私が生物の模型に興味があること、リアルすぎるほどの写実画を得意とすることを知った先生に紹介されたのが、科学イラストレーターという職業。生物を精巧に描く仕事に心を奪われ、フランスの博物館でのインターンを志願しました。京大で身につけた学術・研究の知識を強みにできるようなプロの科学イラストレーターをめざして研鑽を続けています。イラストの修行や居合道部の活動を通して実感したのは、「与えられたことだけをこなしても伸びない」ということ。その分野に長けた人を探し、アドバイスをもらいに訪ねるなど、積極的に学ぶ姿勢がないと成長はできません。京大には学外からいろいろな人が訪れますし、個性的な同級生、卒業後もあらゆるフィールドで活躍する先輩方など、たくさんの出会いに満ちています。自分しだいで想像を超える学びに出会える場。そんな環境に身を置くことは、とても価値のある経験です。

体験型海外渡航支援制度「おもしろチャレンジ」に参加し、フランスで科学イラストを学ぶ。現在は科学イラストレーター、Webデザイナーとしても活動。第34回全日本学生居合道大会個人戦では準優勝を飾った。

鍛え上げた筋肉と自信で 「自由の学風」を勇往邁進

みなさん、体は鍛えていますか？ 私は大学に在籍しながら、学生フィットネスジムSAIL KYOTOを設立しました。筋トレの楽しさに開眼したのは、高校で出会ったラグビーがきっかけ。しかし、高校生の頃から起業を考えていたわけではありません。京大受験を決めたのは高3の秋。志望校を決めた時期は遅かったのですが、短期間の猛勉強の日々を支えたのは、筋トレとラグビーで得た「私ならできる」という確信でした。当初はiPS細胞をもちいた創薬研究に関心があり医学部人間健康科学科に進学するも、研究ははるか遠いゴールを見据えた地道なものとして入学後に気付くことに。自分の適性との違いを悟り、次の目標に方向転換。ジム経営というまったく別の結論にたどり着きました。学生にフィットネスを手軽に届けたいという想いで、日々スタッフと運営しています。感染症対策も会員さんから「やり過ぎ」と言われるほど徹底し、安心な空間づくりを心がけています。いくら設備が整ったジムでも、ひとり黙々と鍛えるのはつらい。初心者ならなおさらです。このジムのねらいは、学生スタッフや会員さん同士、気軽に日々の成果や成長の実感を共有しながら、筋トレの楽しさにめざめてもらうこと。医学部生でラグビー部員で経営者。そんな私に出会えたのは、夢や目標が変わっても思う存分にトライできる京大だったからこそ。あなたのチャレンジもきっとここで花開くはずですよ。

体育会ラグビー部に所属するかたわら、学生のためのジムをつくろうとクラウドファンディングに挑戦。目標額300万円を達成し、学生起業では日本一に。2021年2月に学生フィットネスジムSAIL KYOTOをオープン。



株式会社 Life Coach 代表取締役
加藤 恵多 さん

医学部人間健康科学科 4 回生
愛知県愛知立明和高等学校 出身



奥村 夏子
さん

体育会幹事長 / 2017年度特色入試合格

工学部地球工学科 4 回生
東京都国際基督教大学高等学校出身

部活のある学生生活を取り戻す。 求める声が導く成長

体育会幹事長補佐であった2020年春、体育会の部活動は全面的に自粛中。新型コロナウイルスの影響による未経験の事態に、まわりの友人や先輩は不安を募らせていました。緊急事態宣言の解除後、当時の幹事長とまっさきにはじめたのが、練習再開に向けた取り組み。約2,000人の体育会部員から集めたアンケート結果を大学に提出したり、感染症対策などの知識を問うWEBテストを作成・実施するなど、学生の意識を数値にして大学側にアピール。幹事長就任後も感染防止のガイドラインは状況が変わるたびに見直し、12月には全ての部活の活動再開に漕ぎ着けました。もともとは先輩の誘いを断れずに参加した執行部。幹事長の就任もいわばなりゆきでしたが、各部活から聞こえてくる苦境の声に耳を傾けるうちに責任感が芽生えました。学んだのは感情論では人を動かせないということ。同じ目的に向かって行動するために、取り組みの意義を論理的に訴えながら奔走する日々でしたが、日に日に大きくなるまわりからの感謝の言葉が日々の支えになりました。私が京大を受験したのは、環境問題をとおして人々の役に立ちたいという想いから。幹事長を経験して、その想いは確かな指針へと成長しました。自ら選ばないような道もひとつの選択肢。あなたも京大の環境にもまれながら、自分の可能性を広げてください。

2020年10月から第71代体育会幹事長としてコロナ禍の部活動を支えるべく奔走。高校時代に環境問題に関心をいだき、本格的に学べる場を求めて工学部地球工学科を特色入試で受験。

